

## ソヴェト社会におけるインテリゲンツィヤ

— 1960年代の動向を中心として —

さわ だ ぐん じ ろう  
沢 田 軍 治 郎  
(法経教室)

(昭和48年5月30日 受付)

現代ソヴェト社会について社会学的観点から論じる場合、基本的には二つの立場があるように思われる。一はソヴェト社会を資本主義社会と同質的な産業社会とみなす立場であり、他はソヴェト社会を共産主義社会へ移行しつつある社会主義社会とみなす立場である。

本稿では、後者の立場から、インテリゲンツィヤ概念の定義、1960年代におけるインテリゲンツィヤの量的変化・質的構成などの諸問題を考察することによって、階層としての現代ソヴェト・インテリゲンツィヤのかかえる諸矛盾とその解決への途をさぐった。

インテリゲンツィヤ問題はソヴェト社会主義の試金石であり、ソヴェト社会が共産主義社会へ前進するためには、どうしても解決しなければならない問題である。

## I 社会主義体制とインテリゲンツィヤ

かつて筆者は次のように述べたことがある。「帝政ロシアとソ連の経済、社会、政治体制のあらゆる相違にもかかわらず、体制インテリゲンチヤ（広義のインテリゲンチヤ）の中から批判的インテリゲンチヤ（狭義のインテリゲンチヤ）があらわれる過程は全く一致している。」<sup>1)</sup>

一般に、権力と民衆とインテリゲンツィヤの三者の関係から考えると、図式的に次の4つのインテリゲンツィヤの類型が成立する。<sup>2)</sup> 第1は、権力に密着し、大衆からは断絶したインテリゲンツィヤ（権力型）であり、第2は、権力にも参加せず、民衆からも離れているインテリゲンツィヤ（中間型）であり、第3は、権力に抵抗しつつ、民衆と結びつくインテリゲンツィヤ（民衆型）であり、第4は、社会主義体制の成立により、権力と民衆との利益が一致している場合に、その双方に奉仕するインテリゲンツィヤ（社会主義型）である。

この類型を支持するならば19世紀の封建農奴制的ロシア社会におけるインテリゲンツィヤについて、第1の権力型から第2の民衆型への移行を論じることは可能であり、有意義である。しかしながら、10月革命とそれに続く半世紀余りにわたる社会主義建設という歴史的現実を認めるかぎりにおいて、ソヴェト社会におけるインテリゲンツィヤについて、同様の議論を展開することは不可能となるはずである。かくて、デカブリストやナロードニキに代表されるような19世紀ロシア・インテリゲンツィヤを現代ソヴェト社会に再現させるこの図式は再検討をせまられることになる。

以上は自己批判として、ソヴェト社会研究に関する基本的立場を表明してきたが、次にわが国のソヴェト研究者にみうけられる超体制的観点ともいべきものを指摘しておきたい。

それらの観点は、大別して2つの立場に帰するようと思われる。第1の立場はいわば「右からのソヴェト社会批判」というべきものであり、第2の立場はいわば「左からのソヴェト社会批判」というべきである。

第1の立場に立つ研究者は、ソヴェトの資料に関して、ソヴェト学者とは異なる解釈を行なうことによって、ソヴェト社会を資本主義社会と同質の社会とみなしている。この場合、彼らは、理論的には、資本主義的不平等と社会主義的不平等とを同一視し、実証的には、現実にもみられる両者の差異の表われを無視している。

第2の立場に立つ研究者<sup>3)</sup>は、社会主義の理念とソヴェト社会の現実との隔たりに絶望し、ソヴェト社会を社会主義社会と認めない。この場合、彼らは、社会主義的不平等から共産主義的平等への移行の可能性を、少なくとも現段階のソヴェト社会には認めていないようである。

現代日本におけるソヴェト研究者の社会的役割について考えてみると、上述の2つの立場が、結局のところ、資本主義社会擁護の役割を果しているのではないかと、筆者はひそかに恐れる。

以上はわが国ソヴェト研究者一般の傾向について概括してきたが、社会学の領域に限定して、この傾向をより具体的にみてみよう。

例えば、辻村明氏は「インテリが社会主義の墓穴を掘る」という弁証法的メカニズムを展開している。<sup>4)</sup>「共産党宣言」において、マルクスが「かれら（ブルジョア階級）は何よりも、かれら自身の墓掘人（であるプロレタリア階級）を生産する」<sup>5)</sup>と述べているのと同じ意味において、辻村氏は、インテリゲンツィヤが社会主義の墓掘り人になっている、と主張する。辻村氏によれば、ソヴェトにおけるインテリゲンツィヤの増大は自主的思考を呼びおこし、自主的思考は反党的逸脱をもたらし、社会主義社会の墓穴を掘るものである。マルクスが「かれら（ブルジョア階級）の没落とプロレタリア階級の勝利は、ともに不可避である」<sup>6)</sup>と述べたのをソヴェト社会に適用するならば、辻村氏は「党権力の没落とインテリゲンツィヤの勝利は、ともに不可避である」と結論を下さねばならないであろう。

また、渡辺良智氏はM.ルトケヴィッチ他著「社会的移動」（1970年）を紹介した研究ノート<sup>7)</sup>において、「ソヴェトの場合公式的な立場と現実とのギャップをどう解釈するかが最も大きな問題であり、同じデータでも評価が異なるので、必ずしも著者たちの解釈と同じではない」<sup>8)</sup>と述べて、著者たちがソヴェト社会における「階級間の接近」を論じているのに対して、同じデータから「階級固定化の傾向」<sup>9)</sup>を結論づけている。

渡辺氏の論述については後に具体的に検討したいが、以上簡単に両氏の「批判的」研究をとりあげたところからわかるように、彼らの研究は、端的に言って、ソヴェト社会を社会主義社会と認めないという前提から出発し、その立場からすれば当然の結論に到達しているといえよう。なお、両氏は前述の第1の立場に立っているように思われる。

このように言ったからといって、決してソヴェト社会に矛盾が存在しないと主張しているわけではない。ただ、矛盾を含んだソヴェト社会を社会主義社会と認め、その矛盾を資本主義社会のそれと同一視しないことを根本的な立場としたいだけである。

その意味において、ソヴェト社会に矛盾をみだし、内部からその解決に努力している現代ソヴェト社会学者たちを筆者は評価するものである。ソヴェト社会学者B.H.シュエプキンは次のように述べている。「矛盾の認識はその克服の途への決定的な一歩である。このことに関連して、社会学的調査の役割を過大評価することは困難である。社会学的調

査は矛盾を未然に解明することを可能ならしめ、社会発展の矛盾の具体的認識、その計画的解決のための方策のすみやかな樹立を促進している。」<sup>10)</sup>

- 注 1) 拙稿, 「ソヴェト・インテリゲンチャ」(ソシオロジ第47号, 90頁), 1967年  
 2) 日高六郎, 「インテリゲンチャ」, 社会学辞典, 有斐閣, 41—42頁  
 3) ソヴェト文学究者木村浩氏のソ連・東欧学会第一回大会(1972年9月)における報告「スターリン批判とソルジェニーツィンの文学」はその一例である。氏は社会主義の理念とソヴェト社会主義の現実との隔たりを強調する立場に立っている。氏によれば, わが国のソヴェト研究者の80%は心情的に親ソ的であり, ソヴェト社会を社会主義社会として共感をもってながめている。この傾向は, スターリン批判の徹底という点から嘆かわしいものであり, そのような心情は捨て去るべきである, と氏は強調した。しかし, 筆者自身の卒直な感想をいえば, この学会大会の雰囲気は全体として右翼的であった。  
 4) 辻村明, 総論——社会主義の運動法則に関する試論——(辻村明編, 「現代ソヴェト社会論」, 日本国際問題研究所, 2—6頁), 1970年  
 5) マルクス・エンゲルス著, 大内兵衛・向坂逸郎訳, 「共産党宣言」, 岩波文庫, 56頁  
 6) マルクス・エンゲルス著, 前掲書, 56頁  
 7) 渡辺良智, 「ソヴェトの社会的移動」(社会学評論87号, 50—62頁), 1972年  
 8) 渡辺良智, 前掲誌, 50頁  
 9) 渡辺良智, 前掲誌, 61頁  
 10) В. Н. Шубкин, Социологические Опыты. М., Мысль, 1970, стр. 13

## II ソヴェト・インテリゲンツィヤとは何か

わが国でもジャーナリズムで大きくとりあげられている, 物理学者サハロフや作家ソルジェニーツィンは, たしかに形の上では19世紀のロシヤ・インテリゲンツィヤと同じく「異議申し立て人」である。ソヴェト現代史研究家である菊地昌典氏は「ソ連社会主義を語るなら, まずわれわれは, これら『狂人』(サハロフ, ソルジェニーツィンなど)を『狂人』とみなすか否かに答えなければならない。」<sup>1)</sup>と書いている。スターリン批判および現存のスターリン主義的要素批判の立場をとる菊地氏は, 前述の木村氏や「インテリゲンツィヤ=社会主義の墓掘り人」論をとる辻村氏と通ずるものをもっている。しかし, 今はこの問題に深入りすることはできない。

ソヴェト・インテリゲンツィヤとは何かを社会学の立場から考えるとき, おのずから菊地氏とは次元の異なる観点に立たざるをえない。それは, ソヴェト社会学者たちが問題にしているように, インテリゲンツィヤを階層としてとらえる観点である。周知のように, ソヴェト社会では生産手段の所有形態の差異から階級を区別している。ソヴェト社会では生産手段は社会的所有となっている。社会的所有には「国家的=全人民的」所有形態と「集团的(コルホーズ的)」所有形態とがあり, 前者には労働者階級と勤務員階級とが対応し, 後者にはコルホーズ農民が対応する。しかし, ソヴェト社会学者たちはたんに生産手段の所有形態からだけ, 階級の問題を説明しているわけではない。すでにレーニンが「国家と革命」において, 共産主義社会の低い段階(社会主義社会)と高い段階(共産主義社会)とを区別し, 前者ではまだ不平等が残ると述べているように, 現段階では「労働の性格」による社会的差異が残っている。<sup>2)</sup>それは頭脳労働と肉体労働との間の差異であり, 教育程度による差異でもある。このように, ソヴェト社会学者は現に残っている差異を認め, その解消をめざすことをうたい, 解消しつつあるとみなしている。

A. A. アムヴロソフによれば、インテリゲンツィヤと類似した概念として頭脳労働者、勤務員があり、通俗文献ではこれら3つの概念は同一視されているが、科学的文献では、一般に認められているとはいえないけれども、区別されているという。<sup>3)</sup>

彼によれば、ソヴェトの最近の文献においては次のような定義が試みられているという。C. A. クーゲリやK. П. ブースロフは一部のインテリゲンツィヤ（生産インテリゲンツィヤ＝技師、技手など）を労働者階級に含めている。クーゲリは「物的生産部門の国家企業で働いているインテリゲンツィヤの一部は……労働者階級のグループとみなすことができる」<sup>4)</sup> といひ、ブースロフは「現代の生産インテリゲンツィヤは労働者階級のあらゆる特質をそなえている。高い水準の特殊のおよび一般的知識を有し、それを生産過程に応用している労働者階級の代表者の特質をそなえている」<sup>5)</sup> という。また、O. И. シュカラタンは「現代ソヴェト社会では……全人民的所有の企業や機関で働く、物的生産および流通部門のすべての勤労者は労働者階級の一員である」<sup>6)</sup> と述べている。

彼らはソヴェト社会の諸階級間の接近を主張するあまり、現実と一致しないような定義をもちだしているように思われる。これらの定義に対して、アムヴロソフは次のように批判している。「インテリゲンツィヤを階級によって分けたり、特別の社会階層とみなさないことは正しくない。この場合には、第1にインテリゲンツィヤの諸部分間の差異は階級的差異によって示され、第2に労働者とコルホーズ員、労働者とインテリゲンツィヤとの社会的差異の克服というもっとも重要な課題が撤回されることは明らかである。」<sup>7)</sup> 3つの概念のうち、もっとも広い意味で使われているのが「頭脳労働者」であり、「非肉体労働者」といいかえることができよう。また、アムヴロソフによれば、「言葉の字義通りの意味においては、勤務員とは、国家および社会組織に勤務し、その労働に対し規定の賃金を受けとっている社会主義社会の労働者である。低い教育しか受けていず、肉体労働をしている一部の勤務員は当然知識人ではない。」<sup>8)</sup> したがって、勤務員とインテリゲンツィヤとを区別する指標は、労働の性格と教育水準ということになる。アムヴロソフは、B. C. セミョーノフにしたがって、勤務員を「主としてサービス労働に従事する勤務者」<sup>9)</sup> と定義する。かくしてアムヴロソフは、M. M. ルトケヴィッチにしたがって、インテリゲンツィヤを「中等専門ないし高等教育を必要とする高度の頭脳労働に従事する諸個人からなる社会集団、階層」<sup>10)</sup> と定義する。この定義は現段階のインテリゲンツィヤを適確に表現していよう。

以上のような意味におけるソヴェト・インテリゲンツィヤは、1917年から今日にいたるまで、どのように形成され、成長してきたのか、ここで簡単に概観しておきたい。

まず第1に、10月革命に対するインテリゲンツィヤの態度については、革命側・中立・反革命の3つに分類できる。革命側に立ったインテリゲンツィヤは、「新しい社会制度が祖国の運命に進歩的な変化をもたらすことを理解し、自分たちの知識と経験をソヴェト政権に役立てた。」<sup>11)</sup> 小ブルジョア出身のインテリゲンツィヤは、「生じた事件がわからず、『政治』への不介入を唱えて、中立的、静観的な態度をとった……この『中立』と『政治的無関心』は、当時ソヴェト政権に有利に作用した。」<sup>12)</sup> ブルジョアジー、貴族出身のインテリゲンツィヤは、「社会主義革命を受け入れなかっただけでなく、ソヴェト政権の施策をサポートージュしたり、ソヴェト政権と積極的に戦いはじめた。」<sup>13)</sup>

第2に、革命直後には旧インテリゲンツィヤの利用策がとられた。<sup>14)</sup> 彼らの経験と知識を利用しないでは社会主義への移行は不可能であるとレーニンは考えていた。ソヴェト政権は、用心深く監視しながら、彼らに仕事をまかせ、高賃金を支払い、良い物質的条件と

日常生活を提供し、そして彼らを再教育した。

第3に、新インテリゲンツィヤ養成の問題があげられる。<sup>15)</sup>これは2つの方法によって行なわれた。1つは革命後最初の数年間とられた方法で、労働者の中から有能な人材を抜擢して指導的地位につけ、種々の講習会などで速成養成して、インテリゲンツィヤを補充した。もう1つの方法は、その後の教育水準向上の結果とられるようになった、常設教育機関での専門家養成であり、これがいうまでもなく、その後現在にいたるまでのインテリゲンツィヤ養成の主要な方法であった。その場合に、1930年代中頃までは、「労働者階級と農民の出身者が高等教育機関と中等専門学校にできるだけ多く入れられ、搾取階級の残存者の入学は制限された。」<sup>16)</sup>高等・中等専門教育機関における専門家の養成は、後に統計によってみるように、ソヴェト社会の工業化の進展と歩調をあわせて、現在にいたるまで、第2次大戦中の期間を除いて、発展の一途をたどっている。

- 注 1) 菊地昌典「増補・歴史としてのスターリン時代」筑摩書房、1972年、275頁  
 2) 拙稿、前掲誌、72頁参照  
 3) A. A. Амвросов, От классовой дифференциации к социальной однородности общества, стр. 135  
 4) Там же, стр. 136  
 5) Там же, стр. 136  
 6) Там же, стр. 137  
 7) Там же, стр. 138  
 8) Там же, стр. 138  
 9) Там же, стр. 138  
 10) Там же, стр. 138  
 11) M. P. キム編、中西治訳、「ソヴェト・インテリゲンチヤ」、東京創元社、1972年、17頁  
 12) M. P. キム編、前掲書、20頁  
 13) M. P. キム編、前掲書、21頁  
 14) M. P. キム編、前掲書、33—64頁、95—104頁参照  
 15) M. P. キム編、前掲書、65—93頁、104—139頁参照  
 16) M. P. キム編、前掲書、132頁

### III 1960年代におけるインテリゲンツィヤの動向

第1次5ヶ年計画以来の工業化、近年における科学技術革命の進展という背景のもとに、60年代におけるインテリゲンツィヤの量的変化および質的構成について考察してみたい。

第1表 高等・中等専門教育機関の学生・生徒数（人口1万人対）

学 年 度	高等教育	中等専門 教 育	学 年 度	高等教育	中等専門 教 育
1940 ~ 41	41	50	1965 ~ 66	167	158
1950 ~ 51	69	71	1966 ~ 67	176	170
1960 ~ 61	111	95	1967 ~ 68	182	176
1962 ~ 63	132	120	1968 ~ 69	187	178
1963 ~ 64	144	132	1969 ~ 70	188	178

- (出所)1. Народное хозяйство СССР в 1963г., 1964, стр. 571  
 2. Народное хозяйство СССР в 1968г., 1969, стр. 695  
 3. Народное хозяйство СССР в 1969г., 1970, стр. 681

まず量的変化についてみてみよう。第1表にみるように、60年代における高等・中等専門教育の普及率の向上はめざましいものがある。またこの表から、高等教育機関の学生

が中等専門学校の生徒よりも多いことがわかる。党と政府は「1970年までに工業、建設、運輸、農業は高等教育を受けた専門家1人に対して中等教育を受けた専門家を3人ないし4人持つようにする」<sup>1)</sup>ことを1963年に決定していたが、表にみるように、中級専門家の不足は解除されていない。最近の科学技術革命を反映して、第2表にみるように、高等教育機関の学生のなかで、電気技術、オートメーション、化学などの分野の学生数の増加が特に著しい。学生数の増加と関連して、専門家の増加も急速であり、労働人口中に占める専門家の比率は増大を続けている。第3表によれば、1960年から1969年までの間に、労働者・勤務員は42%増加したのに対して、専門家は83%増加した。また同様に、第4表によれば、科学研究者の増加が著しいが、特に顕著な増加ぶりを示しているのは物理・数学、

第2表 専門別高等教育機関学生数（各学年初め 単位 1,000人）

	1950/51	1960/61	1962/63	1965/66	1967/68	1969/70
総 数	1247.4	2396.1	2943.7	3860.6	4310.9	4549.6
1 地 質 学・採 鉱 学	16.2	21.3	23.0	31.1	35.8	38.1
2 鉱 物 加 工	20.9	30.2	31.6	39.5	49.2	55.7
3 エ ネ ル ギ ー 論	23.8	74.7	71.8	85.9	91.5	97.9
4 冶 学 学	14.7	31.5	34.5	46.7	52.0	54.9
5 機 械・器 具 製 作	86.3	302.8	376.4	501.5	549.4	563.1
6 電 気 技 術・器 具 製 作・ 自 動 機 械 学	14.2	91.5	175.1	281.0	310.2	311.2
7 無 線 工 学・通 信	15.6	78.3	112.7	150.9	159.7	159.1
8 化 学 工 学	23.9	56.3	69.2	107.0	121.5	123.7
9 木 材・木 織 維・ セ ル ロ ー ズ・製 紙	8.7	22.9	25.7	30.4	29.5	30.1
10 食 糧 生 産 工 学	10.0	31.3	41.3	57.0	66.4	71.2
11 雑 貨 製 造 工 業	9.5	28.8	35.0	39.4	47.1	52.4
12 建 設	37.1	146.7	180.8	232.8	259.3	285.0
13 測 地・製 図 学	2.8	5.9	6.7	7.7	8.3	8.5
14 水 理・気 象 学	2.8	5.2	5.9	6.6	7.7	8.3
15 農 林 経 済	107.7	236.3	273.7	332.5	363.7	380.5
16 運 輸	23.7	65.6	81.7	112.6	124.4	131.2
17 経 済 学	72.6	217.7	277.3	386.2	458.0	520.4
18 法 学	45.4	40.3	46.6	60.0	67.1	71.0
19 保 健・体 育	113.3	189.2	206.3	242.5	283.6	317.4
20 総 合 大 学 の 諸 専 門 教 育 大 学 の 諸 専 門	87.5	186.9	216.8	279.4	317.7	344.9
21 大 学 の 諸 専 門 大 学 の 諸 専 門	496.3	512.8	624.4	797.1	872.7	886.7
22 芸 術	14.4	19.9	27.0	32.8	36.1	38.3

(出所) 1. Народное хозяйство СССР в 1963г., 1964, стр. 567

2. Народное хозяйство СССР в 1968г., 1969, стр. 680

3. Народное хозяйство СССР в 1969г., 1970, стр. 676

第3表 専門家の増加傾向

国民経済で働く高等・中等専門教育を受けた専門家の数 (単位1,000人)				労働者・勤務員数 (単位百万人)	増加 指数	
	全 門 家	増加 指数	専門家内訳			
			高 等 教 育	中 等 専 門 教 育		
1913年	190		136	54		
1928年	521		233	288		
1941年	2401		909	1492		
1950年	3254		1443	1811		
1960年	8784	100	3545	5239	62.0	100
1961年	9433	107	3824	5609	65.9	106
1962年	9956	113	4050	5906	68.3	110
1963年	10484	119	4283	6201	70.5	114
1964年	11250	128	4548	6702	73.3	118
1965年	12066	137	4891	7175	76.9	124
1966年	12924	147	5227	7697	79.7	128
1967年	13855	158	5565	8290	82.3	133
1968年	14956	170	6042	8914	85.1	137
1969年	16100	183	6500	9600	87.9	142

- (出所) 1. Народное хозяйство СССР в 1967г., 1968, стр. 665  
 2. Народное хозяйство СССР в 1968г., 1969, стр. 558  
 3. Народное хозяйство СССР в 1969г., 1970, стр. 529, стр. 549

第4表 分野別科学研究者数(人)

	1963年	1968年	1969年
総 数	565958	822910	883420
1 物理・数学	54898	82957	88979
2 化学	28810	41734	43984
3 生物学	23858	34097	36428
4 地質・鉱物学	15136	19265	19648
5 工学	245441	362972	390910
6 農・獣医学	27993	33342	34811
7 歴史・哲学	24592	34124	35850
8 経済学	24364	46711	52993
9 言語学	32606	44200	46094
10 地理学	5428	6649	6930
11 法学	2950	4117	4410
12 教育学	20003	29344	30310
13 医・薬学	34556	44597	47696
14 芸術学	7922	10573	11377
15 建築学	1803	2410	2485
16 心理学	—	—	1377
17 その他	15598	25818	29138

- (出所) 1. Народное хозяйство СССР в 1963г., 1964, стр. 590  
 2. Народное хозяйство СССР в 1968г., 1969, стр. 696  
 3. Народное хозяйство СССР в 1969г., 1970, стр. 695

工学、経済学などの研究者である。

次にインテリゲンツィヤの質的構成について考察する。ここでは、社会的移動(世代間および世代内)、所得水準、政治参加などに関して、インテリゲンツィヤと他の勤労者とが接近しつつあるかどうかを検討したい。

前述のように、専門家の増加速度は労働者・勤務員のそれよりもはるかに急速であるから、専門家の自己補充だけでは専門家の需要を満たすことができず、専門家は労働者、勤務員、農民から補充されなければならない。すなわち、世代間移動性の高さが必然の傾向となる。実際に、第5表からは、その様相をうかがうことができる。この表によれば、労働者・農民出身者が過半数を占め、専門家の自己補充率は微々たるものである。この表の解釈に関して、筆者は渡辺氏と見解を異にするものであることをここで明らかにしておきたい。渡辺氏は、専門家の低い比率、労働者の高い比率を、当然のことながら、認めているが、専門家は「勤務員出身というのが、相当の数に上った」<sup>2)</sup>とあいまいに述べ、それをもって彼の結論的予測である「インテリゲンツィヤの自家再生産が今後顕著になるであろう」<sup>3)</sup>ことの論拠の1つとしているのである。この表をそのまま読めば、労働者出身がもっとも多いことは明らかであるから、「専門家は労働者出身が多い」と一般化すべきなのであり、インテリゲンツィヤが固定化するという予測はでてこないはずである。他の資料の解釈およびそこから導きだされている「固定化」の論拠について、さらには「勤務員」と「インテリゲンツィヤ」の概念の使い方についても、氏と見解を異にするが、紙数

の関係上割愛したい。なお、この世代間移動は、第6表からもうかがえる。すなわち、農村青年が職業技術学校を経て専門家への途を歩みはじめていることがわかる。

第5表 専門家の社会的出身(絶対数%)

	労働者	農民	勤務員	専門家
製管コンビナート (418)	129 (30.8)	87 (20.8)	202 (48.4)	
耐火煉瓦コンビナート (349)	163 (46.7)	104 (30.0)	82 (23.3)	
タービンモーター工場 A(1111)	494 (44.4)	284 (25.6)	270 (24.3)	63 (5.7)
タービンモーター工場 B(836)	436 (52.2)	72 (8.6)	296 (35.4)	32 (3.8)
ウラル商会 (31)	14 (45.2)	3 (9.7)	12 (38.7)	2 (6.4)

(出所) 渡辺良智, ソヴェトの社会的移動, 社会学評論 第87号, 55頁, 第15表

第6表 職業技術学校生徒の構成  
(単位 1,000人)

	総数	都市青年	農村青年
1950年	385	85	300
1960年	864	337	527
1962年	1057	413	644
1965年	1151	480	671
1967年	1482	594	888
1968年	1591	644	947
1969年	1713	700	1013

(出所) 1. Народное хозяйство СССР в 1963г., 1964, стр. 496  
2. Народное хозяйство СССР в 1968г., 1969, стр. 564  
3. Народное хозяйство СССР в 1969г., 1970, стр. 552

世代間移動と同様に、世代内移動も活発に行なわれている。1958年の教育改革以来、勤務しながら教育を受ける者の数がかかなり増加した。第7表からわかるように、高等教育機関の学生のうち、夜間部と通信教育部の学生数が1960年以降は過半数を占めている。このような学習により、労働者は自分の世代内で上昇移動を遂げるのである。例えば、モスクワ電気工学工場での調査によれば、半熟練工として出発した1000人の労働者のうち、295人が技術者、680人が高技能工、25人が平均的的技能工になった。<sup>4)</sup>

石川晃弘氏も指摘するように、ソヴェト社会における階層化要因としての所得高は、第1に、上限と下限の差が資本主義社会にくらべて小さいことと、第2に、物質的な富が資本に転化できないこととにより、社会主義のもとでは資本主義社会に比べて小さな役割しか果さなくなっているといえる。<sup>5)</sup> 第8表は職種別ではなく国民経済部門別の賃金を示している。この表によれば、間接的にはあるが、インテリゲンツィヤと他の勤労者との所得格差がそれほど大きくはなく、しかも縮少しつつあることがわかる。

最後に政治参加の側面についてみてみよう。前述のように、専門家の急速な増大という背景のもとに、労働者、農民およびその子弟の教育を通じての上昇移動が促進されてきた。それにともなって、労働者、農民の技術水準のみならず、一般教育水準も向上し、彼らが社会管理に参加する条件が成熟してくる。その表われが、第19回、第20回、第23回党大会における代議員総数に対する労働者、農民の比率の増加である。労働者の場合7.6%, 18.5

第7表 高等教育機関の学生数(単位 1,000人)

	1950/51	1960/61	1965/66	1968/69	1969/70
高等教育機関学生総数	1247	2396	3861	4470	4550
昼間部	818	1156	1584	2029	2140
夜間部	27	245	569	670	668
通信教育部	402	995	1708	1771	1742

(出所) 1. Народное хозяйство СССР в 1968г., 1969, стр. 679  
2. Народное хозяйство СССР в 1969г., 1970, стр. 675



第8表 部門別労働者・勤務員月間賃金（単位ルーブリ）

	1950年	1960年	1965年	1968年	1969年
国民経済全部門	64.2	80.6	96.5	112.7	116.9
工業	70.8	91.6	104.2	121.9	127.7
そのうち労働者	69.0	89.9	101.7	118.6	124.7
ソホーズ等	38.3*	53.8*	74.6	92.1	93.2
運輸	70.7	87.0	106.0	126.2	131.3
通信	52.9	62.7	74.2	87.9*	93.5
建設	60.5	92.4	112.4	131.2*	139.9*
そのうち労働者	56.5	89.2	108.4	127.3	136.6
商業・共同食堂等	47.0	58.9	75.2	90.6	92.9
公営事業	49.2	57.7	72.0*	88.1	91.3
保健・体育・社会保障	48.6	58.9	79.0	90.2	91.1*
教育・文化	66.8	69.9	93.6	102.8	103.9
芸術	55.9	63.7	78.2	92.3	93.4
科学	93.7*	105.3*	116.8*	129.3	132.6
信用・保険	66.8	70.7	86.3	103.5	106.8
国家・経済管理機関等	68.8	86.4	105.9	118.1	119.7
部門間最高・最低倍率	2.4	2.0	1.6	1.5	1.5

\* が最高・が最低

(出所) Народное хозяйство СССР в 1969г., 1970, стр. 539

%, 28.5%と急増し、農民の場合は7.8%, 13.8%, 11.2%と、全人口中に占める農民の比率の低下と関連させて考えるならば相対的に増加しているといえる。<sup>6)</sup>

以上の諸側面における考察から、1960年代において、インテリゲンツィヤは労働者、勤務員、農民と徐々に接近しつつあるとみるのは、あまりに楽観的にすぎるであろうか。

- 注 1) M. P. キム編, 前掲書, 304頁  
 2) 渡辺良智, 前掲誌, 56頁  
 3) 渡辺良智, 前掲誌, 56頁  
 4) 石川晃弘, 階級——ソヴェト社会の階層的構造——(辻村明編, 前掲書, 92頁)  
 5) 石川晃弘, 前掲論文(辻村明編, 前掲書, 85—86頁)  
 6) 石川晃弘, 前掲論文(辻村明編, 前掲書, 83頁)

## Интеллигенция в Советском Обществе

Гундзиро Савада  
(Кафедра Социологии)

В настоящей работе мы исследовали связь социалистического строя с интеллигенцией, определение понятия «интеллигенция в советском обществе» и тенденцию советской интеллигенции в 1960 годы. Мы попытались выяснить, что советская интеллигенция по своей социальной природе и занимаемому в обществе положению имеет много общего с рабочими и колхозниками.